

# 書評

佐藤弘夫著

## 『起請文の精神史——中世世界の神と仏』

(講談社・二〇〇六年)

## 『神国日本』

(筑摩書房・二〇〇六年)

伊藤 聡

——われ日本の柱とならむ』(ミネルヴァ書房、二〇〇三)と次々と出版され、こんなかい我々にもたらされたのが、ここで採り上げる両書である。

これら一連の著作は、佐藤氏が中世の宗教秩序を総合的に論じた『神・仏・王権の中世』(法蔵館、一九九八)において達成された成果の各論をさらに展開・変奏させたもので、今度の著作も同様の趣きである。

### 二

まず、内容の紹介から入る。最初に『起請文の精神史』から。目次は以下の通りである。

序 章 方法としての起請文

第一章 起請文を読む

1 神文への着目／2 神仏の序列／3 日本の仏／4

弥陀と閻魔／5 死霊の系譜

第二章 神と死霊のあいだ

### 一

佐藤弘夫氏の近頃の精力的な執筆活動は驚くべきもので、『アマテラスの変貌——中世神仏交渉史の視座』(法蔵館、二〇〇〇)、『偽書の精神史——神仏・異界と交感する中世』(講談社、二〇〇二)、『霊場の思想』(吉川弘文館、二〇〇三)、『日蓮

1 古代の神観念／2 〈命ずる神〉と〈応える神〉／3  
御霊とモノノケ／4 〈応える神〉としての疫神

### 第三章 垂迹する仏たち

1 あの世の仏とこの世の神仏／2 中世人にとつての本  
地垂迹／3 浄土信仰と垂迹の役割／4 生身仏の時代

### 第四章 神を拒否する人々

1 コスモロジー論の検証／2 神を拒否する人々／3  
神祇不拝の根拠／4 なぜ垂迹を排除するのか／5 法然  
の決断

### 終章 パラダイムに挑む

序章では、対象として起請文を採り上げることの日本思想史研究（特に中世）における方法論的意義が述べられる。その前提として佐藤氏は、日本思想研究の現状認識より説き起こす。すなわち、曾て中世思想の研究は、法然・親鸞・道元・日蓮などの鎌倉仏教の祖師たちが専ら対象とされていたが、近年は新仏教以外の、伝統仏教・本覚思想・神道思想・中世神話などに研究範囲が広がり、これらも組み込んだ、「総体的把握」が求められるようになった。その結果、研究者集団での了解事項としての中世思想のイメージが拡散してしまった。さらに、特に一九九〇年代以降、「日本思想史」という学問的・枠組みの形成自体を問題にする、ポストコロナリアル批評の影響を受けた研究傾向の擡頭の結果、テキストそれ自体を綿密に読込むという学問方法を過小評価する傾向が出てきたとする。個別思想

に埋没することなく、同時に個々の資料のコンテキストから離れた恣意性を免れるためには、中世人が共有していた価値観・世界観を明らかにすることが必要で、それを明らかにする格好の素材として、佐藤氏が着目するのが起請文である。なぜなら、起請文は地域や階層を越えて、中世人に広く共有されており、そこから中世のコスモロジーを炙り出そうというのが、本書の目的であるとする。

第一章では、思想史研究において起請文に対するアプローチの方法を具体的に述べる。起請文のなかで、中世人独自の思考が読み取れるのは神文であるとする（神文とは、神仏の名を列挙して、違背した場合その冥罰を受けても構わないことを誓約する起請文後半の定型部分）。最初に現実世界と共に、神仏の世界の实在を自明のものとされたのが中世という時代の特徴であることを確認し、次いで神文に記された具体的神仏名と序列こそが、中世人のコスモロジーを理解する鍵であるという。神々の序列に関しては次のことがいえるとする。①日本の神々では、天照大神を頂点に据えるも、厳格ではない。②日本の神より、梵天帝釈や泰山府君など印度（仏教）・中国（道教）系の神々が上位に置かれること。さらに神文には、神々と並んで東大寺大仏、長谷観音など、日本の「仏」（仏像）の名が記され、日本の神と同等なナショナルな存在と見なされていることに注目する。そして、これらの神仏共通の性格として、これらが全て現世（娑婆世界）に属し、極楽浄土の思想と対峙する関係にあるこ

とを指摘する。最後に祖師や御霊なども神文に登場することを述べて次章に繋ぐ。

第二章においては、古代から中世に至る神観念の変遷が辿られる。その変貌の過程は、一方的に意志を表明し、従わない者に対して崇る「命ずる神」から、人々の行為に応じて厳正なる賞罰を下す「応える神」への流れであり、遊行する神から定住する神への変化と対応すると把握され、定住Ⅱ「場」への固着は、神像の出現とも関係していると。後半では、何れも死霊の系譜を引く、御霊神・疫神とモノノケに因して言及される。すなわち、神文において、御霊や疫神の名は登場するのに、モノノケの名はないことについて、なぜこのような意識によって、両者が弁別されているのかという問題について、御霊・疫神は「応える神」であり、モノノケは「祟り」を専らにする存在なるが故に、崇拜の対象になり得ないと説明する。

第三章は、仏教の天部、道教の神々、日本の神々、御霊・疫神、さらには「日本の仏（仏像）」や祖師・聖人たちにて構成される此土（この世）的神仏に共通するものは何かについて論ずる。佐藤氏は本地垂迹の思想に、その根拠を見いだす。従来、仏と神とを結びつけるものとしてのみ認められていた本地と垂迹の関係を、「日本の仏」、祖師・聖人、疫神等にも及ぼす。仏の似姿たる仏像はもとより、聖徳太子をはじめ空海・親鸞等が仏菩薩の化身とされたこと、疫神についても祇園信仰などが挙げられ、彼岸（あの世）の仏が此土（この世）に、神仏その他

の形態を以て垂迹する、その往還こそが中世のコスモロジーなのだと言張し、神仏関係のみに矮小化しがちな、従来の本地垂迹説を巡る議論を批判している。次いで、彼岸の仏菩薩がなぜ敢えて垂迹するのかという問題について、末法・辺土観という時間的・空間的に仏法から疎外された国土とその住民という、中世人が自己と自国へ抱いたイメージこそが、利生の方便としての垂迹思想を希求したのだとする。そして、垂迹神（仏）が顕現する霊地・霊場は、彼岸の仏のいます浄土とこの世との境界であり通路であって、霊場における納骨の風習や、社壇浄土としての神社参詣も、浄土へ至るステップだったとする。この章では最後に「生身仏」の信仰についても言及されているが、これについても垂迹の究極的な方法と位置づけられる。

第四章は、以上述べてきた、中世世界を覆っていた神仏コスモロジーに抗し、拒否した存在を論ずる。即ち、法然・親鸞に代表される鎌倉新仏教の神祇不拜の態度である。ここで敢えてこのことを採り上げる所以は、拡散してしまった中世思想のイメージを、どのように統合するかという問題意識に発している。すなわち、鎌倉新仏教の専修化・選択的立場と、多種多様な神仏の遍在する神仏コスモロジーを架橋してその関係性を考察することを通じて、中世思想の総合把握の第一歩としようとするのである。法然等専修念仏において、垂迹を越えて本地と直接結び付く道を目指し、垂迹的存在は否定しないものの、救済者とは認めない。ここでは、このことの宗教思想としての意義より

も、当時の垂迹信仰の問題性について注目する。すなわち、霊地・霊場が女性や被差別者を排除したことや、霊場参詣が経済活動と密接に結びついたことにより、多くの人々が救済の対象からこぼれ落ちてしまった。法然たちが目指したのはこのような信仰の克服であり、佐藤氏はここにこそ新仏教運動の意義を見いだすのである。

### 三

次に『神国日本』に入る。その目次は次の通り。

はじめに

序章 神国思想・再考への道

1 「神国」の常識を疑う／2 放逐される天皇／3 「神

国」論への視座

第一章 変動する神々の世界

1 古代的神祇秩序の形成／2 中世的神祇制度の形成／

3 神々の反乱／4 土地を支配する神々

第二章 神と仏の交渉

1 神仏習合の展開と本地垂迹説の成立／2 崇り神と罰

する神／3 本地垂迹説の歴史的意義／4 冥界のコスモ

ロジー

第三章 神国思想の成立と変容

1 古代における「神国」の観念／2 中世的「神国」へ

の転換／3 神国日本の境界／4 辺土と神国／5 神国

思想に見る普遍主義

第四章 神国思想の歴史的意義

1 悪僧の跳梁と神国／2 新仏教批判の論理としての神

国思想／3 蒙古襲来／4 イデオロギーとしての神国思

想／5 中世的神国思想の観念性

第五章 疎外される天皇

1 神から人へ／2 「裸の王様」としての天皇／3 神

国のなかの天皇／4 なぜ天皇が必要とされたか

終章 神国の行方

1 ナシヨナリズムとインターナシヨナリズムのはざま

で／2 神国思想の歴史的展開／3 自国中心主義の旋

回／4 神国思想と現代

序章では、まず『神皇正統記』の記述を検討しながら、「神国」イメージの問題を祖上に上げ、従来の研究においておおかたの賛意を得ている、仏教的辺土思想の克服としての神国思想という図式に疑義を呈する。次いで、神国思想と関係の深い、天皇の「万世一系」イメージについても、決して不変固定的だった訳でなかったことを示して、我々の認識が近代に生み出されたイメージの所産であって、歴史的にはもつと多様なものだったことが示唆される。そして「神国」をめぐる議論は、「神道」内部に限定してはならず、仏教・儒教・陰陽道などを含んだ宗教世界全体のみでなされなければならないこと、また古代・中世・近世とその時代ごとの社会関係、政治情勢に

よって、神国思想は変転してきたのであるから、時代ごとの思想的・歴史的コンテキストのなかで読み解かれねばならない、と述べられる。

第一章では、古代から中世に至る神祇秩序の変遷が辿られる。天皇の明御神（アラヒトガミ）化に伴い、皇祖神たる天照太神を頂点とする神々のパンテオンが作られ、記紀によって体系的神話記述が成立、さらに律令体制の確立に伴い、神祇制度も整備される。ところが、律令体制の解体とともに、神祇制度も変質、国家的神祇制度は二十二社・一宮制に再編される。諸神社の生き残りをかけた模索が始まり、それにつれて古代的パンテオンも崩れていく。「神々の下剋上」ともいべき状況が現れ、日吉山王のごとき「天下第一の名神」を公言する神格も登場する。また、荘園体制の広がりのなかで、寺院系領主が自家の荘園を仏土としたのと同様、神社もその荘園を神領とし、それを侵す者への神罰を主張、荘園支配をイデオロギー面から正当化する存在となっていく。

第二章は、中世の神国思想の環境としての、神仏習合的、本地垂迹のコスモロジーが概観される。この章の内容は概ね、前書『起請文の精神史』と重なる。まず、本地垂迹説の形成が述べられ、次いで崇り神から罰する神への変容が説明される。さらに垂迹的存在のなかには、日本の「仏像」や祖師・聖人、印度の天衆や道教の神々を含み、それらが総体として神仏のコスモロジーを形成していたことが述べられる。

以上の第二章はいわば導入で、第三章からが本論である。ここでは古代から中世に至る「神国」の觀念の変遷を辿る。先ず、古代の神国觀念について、これが七世紀の国際情勢、就中新羅との対抗意識により作り出され、九世紀になって特に強く意識されはじめたとし、またそこでの守られるべき「神国」とは天皇の身体を中心とした、その支配に属する国土と人民を、天照大神以下の有力諸神が守護するものとされる。古代の神国思想においては仏法は意識的に排除されていたが、中世になると一変する。両者を結びつけるのが、仏教の土着化の現われともいべき本地垂迹思想であり、仏国であることと神国であることは重なりあうと述べる。さらに、中世の領域の自覚化について述べたあと、辺土末法思想と神国思想との対立という通説を批判、末法辺土の日本である故に、仏の垂迹たる神の存在を必要とするという中世における論理を示し、寧ろ末法辺土観こそが中世の神国思想の不可欠な要素だったことを明かす。

第四章では、中世における神国思想の歴史的展開について論じる。まず、中世前期の「神国」の語が盛んに喧伝される三つの事件、すなわち①院政期の神社相論、②鎌倉時代の新仏教の排撃、③蒙古襲来を採り上げ、何れも国家権力が体制の動揺に対する危機感から「神国」意識を表出させていったことが説明される。特に③について従来、神国思想興隆の画期として、元寇が特筆されることが多いが、実際にはこれが起点になってはいなく、神国思想興起の第一原因ではない、という。つまり、

対外関係の変化と必ずしも相応しない、内部的な論理として展開する神国思想の「観念的」性格が、ここで指摘されている。

第五章は、天皇と神国思想との関係についての考察である。すなわち、古代において現御神としての權威を付与された天皇は、中世に至る過程で「神」から「人」へ転落する。天皇の墮地獄譚が語られるのもその傾向を如実に示すものである。中世には新たな權威化として即位灌頂が創造されるが、天皇と大日如來の一体化するこの儀式は、あくまで限定された部分に流通した秘事に過ぎず、天皇の人間化に抗するものではなかったとする。古代において天皇は国家とは密接不可分なものであり、神国思想は本来、天皇の存続を正当化する論理として創造されたものだったが、中世になると国家と天皇とは分離し、天皇は国家体制を維持するための一機関になってしまった。その結果、中世の神国思想において、天皇の存在は希薄なものとなってしまった、という。にもかかわらず、中世において天皇家が必要とされ続けたかについて、佐藤氏はその理由のひとつは天皇を越える「支配権力結集の核」が現われなかったこと、もうひとつは鎌倉新仏教などが見いだした超越的權威に對抗・否定するには天皇を存続させるほかなかったからだとする。

終章は、室町から近世・近代への神国思想の推移が概観され、本書に於いて中心的に論じられた中世（前期）の神国思想がどのように変質していったかが辿られている。佐藤氏によると、中世後期以降の神国思想の変化は、現世第一主義的傾向の広が

りにより、彼岸世界の縮小が大きな影響を与えたという。本地仏の世界へのリアリティーが失われると、現世における神々の垂迹の性格も失われてしまい、結果として本地垂迹思想に基づくコスモロジーを基盤として成り立っていた中世的神国思想は、仏法との関係を稀薄化させていくのである。中世後期以降、神は仏よりも心と結びつき、人の内部にあって現世的人間関係・君臣秩序を支える働きをするものになる。本地垂迹思想が規制していた神国思想の持つ自民族中心主義への指向も歯止めがなくなり、他国の禽獸視や排外イデオロギーの中核に神国思想が据えられ、近代以降にも受け継がれていくのだという。

#### 四

以上、二書の内容を紹介したが、一方は起請文、他方は神国思想をその題名に掲げているが、実際には、その中心テーマというべきは、如上の紹介から明らかなように、双方とも中世神仏のコスモロジーとその基盤たる本地垂迹思想（ここでの内容は、通説のごとき神仏間関係のみ限定されるものではない）である。

特に『起請文の精神史』の場合、起請文それ自体はあくまで素材に過ぎない。『神国日本』も、神国思想それ自体についてメインに論じられるのは第三・四章で、第一・二章は古代から中世にかけての神々のコスモロジーの変遷について、第五章は中世天皇論であって、本書が神国思想そのものというより、中世の神国思想を成り立たせている環境を主題としていると見な

しうる。

また冒頭でも述べたように、両書とも『神・仏・王権の中世』を母胎にして生み出されたものである。『起請文の精神史』は、その第Ⅳ部「神仏のコスモロジー」第二章「怒る神と救う神」、『神国日本』は、第Ⅳ部第一章「中世的神国思想の形成」のテーマを中心に構成されている。以前述べたことであるが、『書評・佐藤弘夫著『神・仏・王権の中世』』、『宗教研究』三二一〇、一九九九）、前書第Ⅳ部は、問題の概略を示したに留まり、より詳しい考察は今後に委ねられていた。今回の二書はその補論というべきものとなっている。

ただ、コスモロジーに関する問題は、『神・仏・王権の中世』以後、『偽書の精神史』『アマテラスの変貌』でも採り上げられたものであり、その内容も（使用される資料も含めて）重複するところが多く、既視感を感じることが免れないところがある。また『神国日本』で採り上げられた神国論の中核は中世前期のもので、室町以降については簡略すぎることは否めない。ほぼ同時期に出版された鍛代敏雄『神国論の系譜』（法蔵館、二〇〇六）が、古代より中世末期に至る神国論の流れをほぼ時系列的に辿り、しかも全五章のうち第三章以降が室町以後を対象にしていることと対照的である。

とはいうものの、両書とも入り組んだ多様な課題を解きほぐし、簡潔に説明している。一部の作家や哲学者などの断案に満ちた類書はあるが、専門研究者による一般読者を想定した啓蒙

書が少ないなか、両書の存在は貴重なものとなっている。

（茨城大学教授）